

歴

史

特42

667

047712-000-0

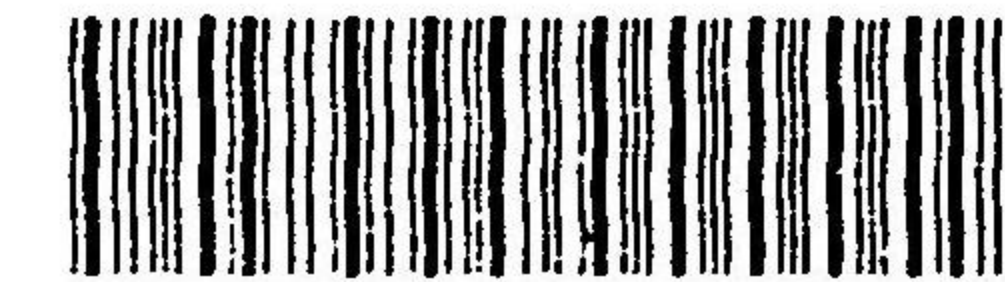
特42-667

歴史

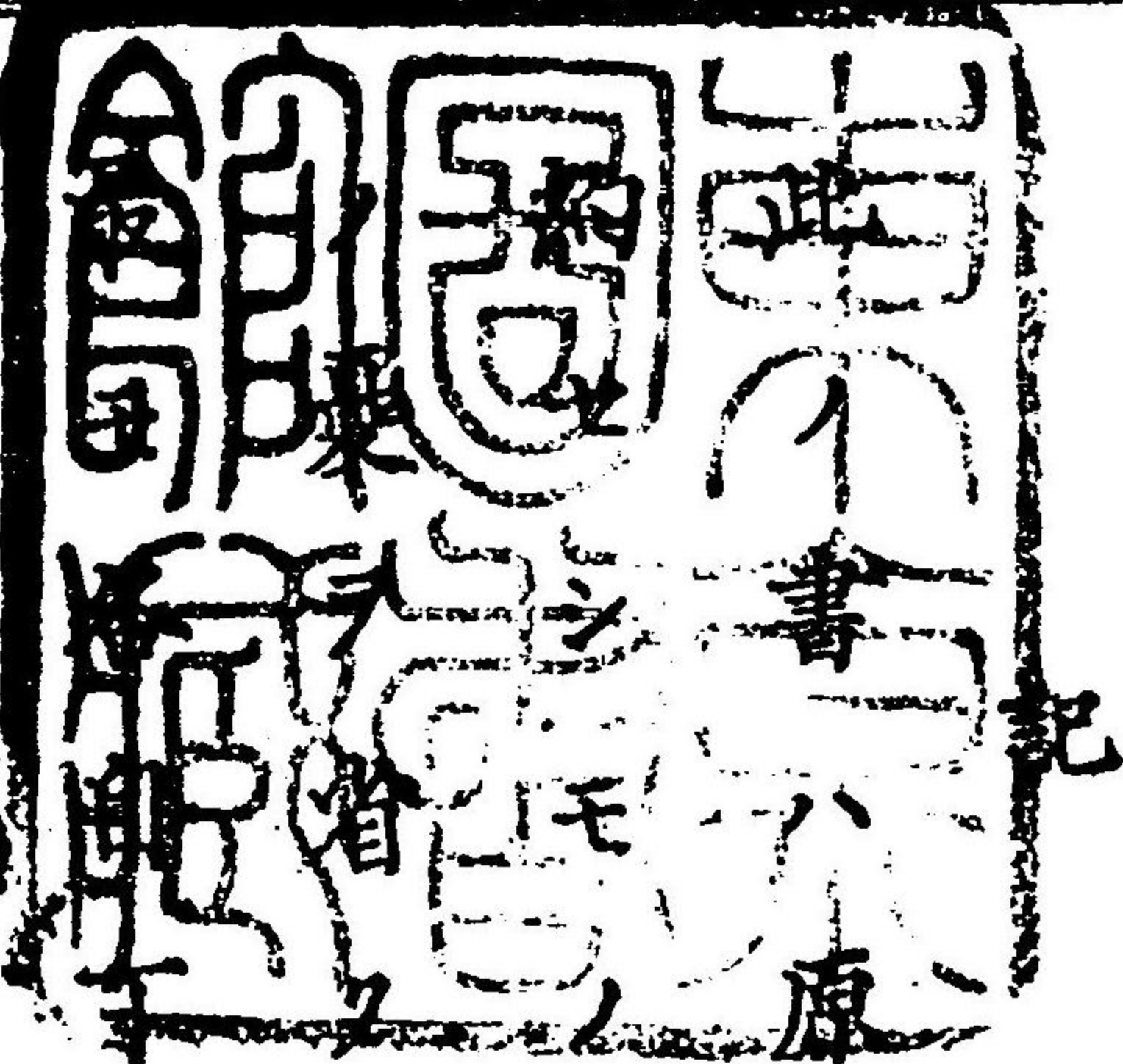
小野 藤太/著

M27

BEF-1503



第一學年歴史



口訓導ノ編纂セシ教師用歴史ヲ簡
 ニシテ生徒カ筆記ノ勞ト誤寫不明
 爲メ印刷セリ
 寧ニ筆記セシムル方宜敷様ニアレ
 トモ何分筆記物數多ク徒ニ倦怠ヲ招クノミニ
 テ筆記物ハ却テ復習ヲ怠リ記憶ヲ惡クスル傾
 トナリ進方モ抄取サレハ是等ノ弊ヲ救ヒ且又
 病氣等不幸ニシテ欠席セシモノ、爲ニモガナ



トノ老婆心ヨリ斯クハ物セシニナン
簡易ヲ主トシタレハ歴史上ノ用語ヲモ俗語ニ
譯セシ所等少カラサレト是モ又生徒ノ便利ヲ
計リタルニ外ナラス

明治二十七年四月二十日

小野藤太誌

歴史

歴史トハ

歴史トハ昔ヨリ今マテノ内ニアリタルヲ調フ
ルモノヲアリマス

此ノ世界ニアルモノハ何ヲモ歴史ノナイモノハ
アリマセン

國ニハ國ノ歴史カアリ、家ニモ、人ニモ、學校ニモ、村
ニモソレ々歴史カアリマス

昔カラアツタ事柄ヲ知テ居テ、何ヲモスル時、自分
ノ行ト引キ合セテ見テ其ノヨシアシヲ考ヘ、又是

歴史ノ効

カヲ後ノ仕方ヲ定ムル助ニスルモノヲアリマス

ワレ〜一學年

一學年ノ成
立

ワレ〜一學年ハ元ノ一學年ノノユリト、尋常小
學校卒業生ノニツヨリ成立タリ

人數

男生百十三人女生十九人アリテ、高等小學校ノ第

四教場ニテ、重ニ片島先生ヨリ教授ヲ受ケオレリ

元ノ學校ヲ
ハ

吾々ハ元ノ學校ヲハ、大キ人ノ内ナリシカ、此ノ學

校ニ來テ見レハ、吾々ヨリモ一層大キク、二倍モ三

倍モアル様ナ人カアツテ、吾々ハ小ナ人ノ内テス

自由ニ話セ
レ

今迄ハ教師モ少クシテ、一時間ノ内テモ先生カ吾
々ノ教場ニ居ラヌ時カ多カリシヲ以テ、自由ニ話
等ヲスル事カアリマシタ

窮屈

此ノ學校ヲハ一時間中先生カ吾々ノ前ヲ離レヌ、
少シ頭カ横向キテモ一寸手カ机ノ上ニ出テモ一
口話ヲシテモ直ニ之ヲ答メ、ナカ〜窮屈ニアリ
マス

遊歩ノ時モ元ノ様ナ自分勝手ナル強情ヲ遊ハ出
來マセン

面白クナル

其後漸ヤク日數メナテ今迄ノ窮屈モ窮屈トハ思

ハス、朋友カ多クシテ却テ面白クナリマシタ

舊來ノ教育制度

寺小屋

舊來人民ニハ學校トテハナク、只寺小屋ノ師匠ニ就テ、いろは、人名、村名、商賣往來ナトテ、舊字ニ學ブノミナリシ

初ノ教育令

然ルニ明治五年教育令出テ、初メテ小學校ヲ立テ、人民一般ニ學問ヲサスル様ニナレリ、左レト當時ハ初メテノヲナレハ極テ不完全テアリマシタ其後種々變更シテ、其ノ學課下等小學校、中等小學

規則ノ改更

尋常高等併置

中學校

三種ノ學校

課ノ二ツニ分レ、又初等科中等科高等科ノ三ツニ分レシトモアリタリ
結局各町村ニ一ノ小學校ヲ立テシメ、之ニ今ノ尋常科、高等科ヲ合セ置キタルナリ、故ニ一郡ニ通シタル高等小學校ハ無カリシ
其ノ代リニ今ノ尋常中學校ト同シ學課ヲ授クル一ノ學校ヲ置キテ、之ヲ日田郡中學校ト云ヒ居リマシタ
左レハ一郡内ニ今ノ尋常小學校、高等小學校、尋常中學校ノ三種ヲ置キ、シカモ高等小學校ハ各町村

費用足ラス

ニ一ツ宛アル譯テアリマシタ
故ニ人民ハ其ノ負擔ニ堪ヘス經費ニ窮シテ、何レ
ノ學校モ皆規則通ニハ出來ス、甚タ不完全ニアリ
マシタ

二十年ノ改正

カ、ムル有様故、明治二十年文部省ニ於テ教育令ヲ
改正シ郡立ノ中學校ヲ廢シ、一郡ニハ必ス一ノ高
等小學校ヲ立ツルヲニナセリ

簡易科

各町村ノ小學校ハ尋常科ノミヲ置キ此ニテモ猶
費用足ラサル所ニハ一層低キ簡易科ヲ設ル様ニ
ナセリ

分教場

後簡易科ハ廢セラレ、尋常科分教場ヲ置クヲニ定
レリ

日田郡高等小學校

創立

本校創立

開校式

校長

明治二十年六月教育改正令ニ基キ、本郡聯合會議
員評議シテ、舊教英中學校々舎ヲ讓受ケ、日田郡高
等小學校ヲ立テ、七月十日其開校式ヲ行ヘリ
校長ハ馬場増美氏ニシテ訓導ヲ兼テ、池田ヤソ氏
裁縫教師トナリ、長尾敬一郎氏雜務係タリ

開校當時ノ狀況

生徒ノ數

創立ノ初メ何人ニテモ入校ヲ許シ、開校ノ當日男
八十人女三人ノ生徒アリ

年齢學力ノ
差

而ルニ其ノ生徒ハ十歳以下ノモノモアリ、十四歳
以上ノモノモアリ、學力モ甚タナカヒアリテ、到底
一組ニシテ、教授スルコトハ六ヶ敷アリマシタ

二組ニ分ツ

是ヲ以テ七月十三日ヨリ、編級試験ヲ行ヒ、優等ノ
モノ二十名ヲ取テ第二年級トナシ、其他ハ悉ク一
年級ニシテ、七月二十日初メテ授業スル様ニナレ

三組トナル

後又一^レ年級ヲ甲乙ニ分テ都合三組トナレリ

科目

其ノ學課ハ修身、讀書、作文、習字、算術、地理、理科、圖畫、
躰操、英語ノ十課ニテ、女子ニハ裁縫ヲ課セリ

學課ノ變更

二十五年ノ改正ニテ、英語ヲ廢シ、唱歌ヲ加ヘ、一年
級モ歴史ヲ學フ様ニナレリ

困難

開校ノ當時正科ノ教員ハ馬場氏一人ノミナレハ、
行キ届カサルコト多クシテ甚タ困レリ

小川林二氏

故ニ郡書記小川彌十郎林茂ノ兩君時々來リテ授
業ヲ助ケタリ

カクテ間モナク訓導河野欣三郎〔後姓ヲ石〕英語教師上田鍾太郎二氏來リテ大分ヨクナレリ

高等小學校制度

高等小學校ハ尋常小學校ヲ卒業シテ、猶高等教育ヲ受ケントスルモノ、爲ニ設ケシモノナリ
左レハ、其ノ學課モ六ヶ敷、費用モ多分イリマス
本校ノ如キハ一ヶ年ノ經費大抵千百圓位テアリマス

生徒ノ受持

此ノ費用ハ皆ナ生徒カ受持ヘキモノニテ、國家ヨ

基本金

リハ補助スヘキモノテハナイト云フ様ニナリテオリマシタ
然レトモ本校ニハ三千圓ノ基本金カアリマス故、其ノ利子ト、月謝ヲ用ヒ、尙不足ノ所ハ、各町村ノ寄附ヲ仰ク様ニシマシタ

月謝ハ

月謝ハ初メハ十五錢ナリシカ後二十錢ニ上リ、遂ニハ下等級ヲ二十錢トシ、夫ヨリ級ノ進ム毎ニ二錢宛増スヲニナレリ

二十三年ノ改正

後町村、自治制トナリシヨリ、學校ノ規則モ改正トナリ、明治二十三年十月改正令發布セラレ、二十五

町村ノ受持

年十月ニ至リ、初メテ之ヲ本郡ニ實施シタリ

此ノ規則ヲハ、費用ハ悉町村ノ受持トナリ、月謝ハ之ヲ助クルトナリタリ、故ニ月謝ハ各級何レモ

二十錢トナレリ 〔兄弟ノ家
弟ハ十錢〕

猶費用サヘ出來レハ幾許テモ高等小學校ヲ立テテ、ヨキコニナリマシタ

郡内一組合

左レト吾高等小學校ハ幸ニシテ郡内總町村カ一ノ組合トナリテ之ヲ立テタル故、其ノ區域内モ、學校ノ位置モ、舊ト變ハアリマセヌ

管理者

高等小學校ノ經費職員等一切ノヲ管理スルハ

組合長

郡長ナリシ

二十五年改正ヨリハ組合長トナレリ、而シテ本校ノ組合長ハ矢張郡長ナリ

校長ノ仕事

校長ハ校舍器具ノ保護、經費ノ出入、訓導以下ノ管理ヲ司リ、校内一切ノ取締ヲナシ、本校ヲ代表スルモノナリ

訓導

訓導ハ生徒ニ向テ教授スルモノニシテ、本縣ノ教員免證ヲ有スルモノナリ

雇教師トハ

若シ免證ヲ有セスシテ、授業ヲナスモノアルトキハ、之ヲ雇教師ト云フ

雜務係

雜務係ハ校長ノ事業ヲ助クルモノナリ、今ハ廢シ
タリ

學務委員

二十六年ヨリハ學務委員ナルモノ出來テ授業料
ノ徵收等ヲナス

學級受持

授業ハ主ニ第何學年ハ何教員之ヲ教フト學級受
持ニ定メタレト、都合ニヨリテハ、何學課ハ何教員
之ヲ授クト、學課受持ニナスコアリ

六時間

授業ハ毎日六時間ニシテ、土曜ノミ四時間ナリシ
カ、二十五年ヨリハ毎日五時間トナリ、土曜モ午後
ノ休ミハアリマセン

土曜休ナシ

休業

休業ハ日曜大祭祝日避暑冬期休業等ナリ

近頃、大祭祝日ノ内四方拜紀元節天長節ニハ御

眞影拜賀并ニ勅語奉讀式ヲ行フトナレリ

臨時試験

臨時試験ト云フモノアリ、日々授ケシ所ヲ試ミ、其

三ヶ月毎

ノ得點ノ多少ニヨリ、席順ヲ上下ス、臨時試験ハ大

抵三ヶ月ニ一回位ナリ

採點法

採點法ハ各學課、完全誤ナキヲ百點ト定メ、夫ヨリ

誤ノ大小ニ準シテ之ヲ削リ、以テ各課ノ得點ヲ定

ム

出席點

出席點丈ハ前臨時試業ヨリ、此臨時試業迄ノ授業

日數ヲ以テ、百點トシ、其ノ欠席日數ニ應シテ之ヲ
削減ス

上席

各課ノ得點ヲ合セ其多キモノヲ上席トス

採點表

凡テ試験終レハ表ヲ作りテ生徒ニ示ス之ヲ採點
表ト云フ

學期試業

學年ノ終リニハ其ノ學年内ニ授ケシ所ヲ試験シ、
學級ヲ上進セシム、大抵三月末ニ行フ之ヲ學期試
業ト云フ

臨時試業平
均點

學期試業ニハ出席點ヲ除キ小試業平均點ノ又其
ノ平均點ヲ以テ之ニ代ユ

落第

及第

一課十點ニ滿サルモノ及各科ノ通約點、五十ニ達
セサレハ、原級ニ止メ置ク之ヲ落第ト稱ス、然ラサ
ルモノハ上級ニ上ケテ、次ノ學課ヲ教フ及第是ナ
リ

採點法ノ改
正

二十五年ノ改正ヨリハ、臨時試業各科ノ平均點ヲ
學期試業ノ得點ニ平均シ、學年中ノ出席點ヲ加へ、
一科得點滿點ノ四分ノ一ニ充タサルモノハ、落第
トスル様ニナレリ

服制改革

ヒロ袖

ツム袖ハカ
マサハク

習慣不平

便利

一人モヒロ
袖ヲキルナ
シ

生徒ノ衣服ハ從來本邦ノ濶袖ナリシヲ以テ、体操
其他ノ座作進退ニ不便ナリシ、依テ開校ノトキヨ
リ度々説諭シテ、筒袖ニ改メ、且必ス袴ヲ穿タシム
ルコトトナシタリ
サレト今迄ノ習慣ナカク、扱ケス、種々不平ヲ並
立テ容易ニ改良ノ運ニ至ラサリシ
然ルニ筒袖ニシテ見レハ至極便利ナルヲ以テ、其
後日ヲ追ヒテ改良シ、只今ハ一人トシテ濶袖ヲ服
スルモノハアリマセン

帽子及裁縫具

体裁ワルシ

帽子ヲ寄附
ス

戴帽ノ儘禮
ヲナスコト

返却

筒袖ヲ服シ袴ヲ穿ツモ、頭ニ戴ク帽子ナク、甚ダ体
裁悪シク見苦クアリシ
茲ニ於テ二十年九月一日豆隈兩町ノ篤志者、日字
ノ徽章ヲ附シタル獨逸帽子百個ヲ寄附セリ、依テ
之ヲ生徒ニ給與シ、其取扱方、及ヒ戴帽ノ儘敬禮ヲ
ナス方法ヲ教ヘタリ
右帽子ハ給與シタルモノナレトモ、中途ニシテ退
學スルモノハ本校ニ返納スルコトナセリ

裁縫道具

女生徒ハ帽子ノ惠ニ與ラサルヲ以テ、剪刀、尺、裁物
庖刀等總テ裁縫道具ヲ貸與セリ
爾後入學生ニハ學校ノ費用ヲ以テ之ヲ買ヒ與ヘ
來リシ

自辨トナル

然ルニ年々生徒ハ増加シ、費用ハ減セシヲ以テ、二
十二年ヨリハ、一切之ヲ廢シ、今ノ如ク自辨スル様
ニナセリ

鏡引

然レトモ二十二年四月入學生ニハ、殘レル二十箇
ノ帽子ヲ鏡引ニテ貸渡シタリ

寄宿舎設置

下宿

本校盛ニナルニ從ヒ二三里ノ遠キ所ヨリ毎日通
學スルモノアリ

又甚タ遠キ所ハ浦町等ニ下宿ナシオル等、彼此不
都合多カリシ

寄宿

依テ寄宿舎ヲ設ケ小使ヲシテ之ヲ賄ハシメタリ
初メ寄宿生徒ハ各自ニ金錢ヲ携ヘシヲ以テ、往々
無益ノ浪費ヲナシ、或ハ紛失盜難等ノ憂アリ

金錢ヲ預ク

依テ金錢ハ悉ク寄宿舎會計係ニ預ケ、入用ノ時貫

永續ノ規則

ヒ受クルヨウニナシ、舍内ニ於テハ一切金錢ヲ所持スルヲ禁セリ

此ノ規則ハ相變ラス今ニ續キ來レリ

寄宿生ノ功勞

火事

二十餘戸ヤク

二十年十一月二十六日午前四時ニ豆田下町ヨリ

出火シテ、二十餘戸焼失シ、午前六時漸ク鎮火セリ

此朝ハ幸ニ風ナカリシモ、茅屋相連リタルカ上ニ、

怠弱ノ人民

人民怠弱ニシテ、真正ニ人ノ爲ニ勞ヲ取ルモノ少カリシ

生徒ノ消防

是ヲ以テ馬場石黒二氏ハ直ニ寄宿生ヲ引連レテ、火事場ニ駆ケ付、大ニ消防ニ周旋セリ

功績

翌々二十八日ニ至リ、日田郡警察署ヨリ巡查來リ、其勞ヲ謝シ、且ツ消防ニ盡力セシ生徒ノ姓名ヲ記シテ、持テ歸レリ

体育流行

開校以來殆ト二年間未ダ適當ノ遊戲ヲ發見セス、休息時間ノ如キハ、角力ヲ始メテ足ヲ傷ムルモノアリ、或ハ(ツクシリ)合ヒテ喧嘩ヲ慥キ起スアリ、或

休息時間ニ困ル

ハ只茫然トシテ直立シ、休ノ長キニ苦ムモノモアリタリ

ベースボール

然ルニ二十二年十二月五日訓導石橋氏大分師範學校ヨリ、(ベースボール)ノ遊戯ヲ持テ歸リテ教ヘ初メタリ

ベースボール勢力ヲ得ル

爾後此ノ遊戯大ニ勢力ヲ得、店頭ノ丁稚、行商ノ小僧モ、六尺棒ヲ打振テ(ベースボール)ヲナスニ至レリ

好遊戯

本校生徒ハ今モ盛ニ之ヲ行ヒ居レリ、實ニ愉快ナル好遊戯ナリ

体育獎勵

兵式体操

又此頃森文部大臣大ニ体育ヲ獎勵セシカハ、高等小學生徒ニハ銃劍ヲ執リテ、兵士同様ノ操練ヲナサシメタリ

銃器

今残り居ル銃器ハ之レカ爲メ大阪ヨリ買入レタルモノナリ

運動會行軍多シ

運動會、遠足行軍ノ如キモ、多キハ一年五六回ニシテ、少キモ二回ニ下ラサリシ

外國語

英語科

郡立高等小學校ニハ、英語ヲ課スヘキ規則ナルヲ

以テ、本校ニハ折角英語教師ヲ雇ヒ、久シク之ヲ實
施シタリ

英語必要ヲ
感セス

然ルニ本郡ノ如キハ、都會ノ地トハ異ナリテ、外人
ト交際スル見込モナク、又愈進テ高等ノ教育ヲ受
ケントスル人モ甚少キヲ以テ、英語ハ格別ノ必要
ヲ感セサリシ

英語ヲ好マ
ス

且ツ生徒モ亦之ヲ好マス、折角學ヒシ所モ、數日ノ
後ハ其過半ヲ忘却スル有様ナリシ

他ノ學課ヲ
妨ク

又英語科ノ爲メ、他ノ學課ニ差響ヲ及ホシ、其ノ進
歩ヲ妨ケ、復習ヲ怠ラシムルヲモ多カリキ

廢止ノ建議

是ニ於テ二十二年一月校長馬場氏全ク英語課ヲ

郡長用ヒス

廢センヲ建議セリ、然レトモ郡長小倉氏之ヲ用

ヒス

再請又用ヒ
ス

依テ同四月一年級丈ナリトモ之ヲ除カントナリ

ヒシニ、郡長又聽カサリシ

女生徒ニ除
ク

其後久シク續キ來リ、校長竹腰氏ニ及ヒ、女生徒ニ

ハ英語ヲ以テ、隨意課トナスヲ得ル様ニナリタリ

大問題解ス

斯クテ昨二十五年ノ改正ニ於テ、全ク之ヲ廢スル
ヲ得、年來ノ大問題モ遂ニ解タリ

豫備科設置

一年級甲乙
ニ分ツ

同一ノ學課
學力同カラ
ス

本校ハ一年級人數甚々多クシテ、學力年齡モ亦非常ニ異ナルヲ以テ、從來之ヲ甲乙ニ分テ教授セ
レ
左レトモ其ノ學課ハ矢張同一ナルニヨリ、試験ノ
トキハ甲乙ニ關ラス、及第者ハ皆二年級トナセリ
然ルニ一度學級受持トナセシヨリ、生徒ノ學力ニ
非常ノ差ヲ生セリ
依テ二年級ヲモ甲乙ニセント乞ヒシモ、經費續カ

落第生多シ

郡長涙ヲ流
ス

サル爲メ許可セラレサリシ
斯テ其儘押行キ、二十三年四月定期試業ニハ、受験
生百二十四名ニシテ、及第生僅ニ九十人落第生ハ
二年級ノ内、一年乙ヨリ來リシモノ最モ多カリシ
是レ當然ノ結果ニシテ已テ得サルニ出ルコナリ
右證書授與式ヲ行フニ際シ、郡長小倉氏、臨席シ涙
ヲ流シテ落第生ノ多キヲ悲ミ、是レ生徒管理者固
ヨリ罪アリト雖モ、教師モ亦幾分罪ナキヲ得スト
論シ、後來ノ注意ヲ促シタリ、
此等ノコトアリタルヨリ此迄ノ法ヲ改メ、一年乙ヲ

乙ヲ終テ甲
ニ入ル

簡易科卒業
生

豫備科

卒業シタルモノヲ甲組ニ入レ、甲ヲ終リテ始メテ
二年級トナルヲニ定メタリ
然レトモ學課ハ猶同一ナリシヲ以テ、遙下等ト認
メシ生徒モ學年ノ終ニハ甲組ニ勝ルモノ少カラ
サリキ、故ニ定期試験前俄ニ拔擢シテ甲組ニ入ル
ト等ノ混雜アリ
前ノ如ク何レニシテモヨキ結果ヲ得ス、且ツ郡内
四十餘ノ簡易校ヲ卒業シテ、尙修學セントスルモ
ノ行ヘキ學校ナカリシ
依テ二十四年四月遂ニ豫備科ヲ設ケ、尋常小學四

年ト同一ノ程度トナシ、尋常三年及簡易卒業生ハ
試験ヲ用ヒス、入學ヲ許スヲニナシタリ

御眞影及勅語謄本

御眞影

明治二十三年十一月三日天長ノ佳節兩陛下ノ御

眞影ヲ拜戴ス、是レ岩崎知事ノ請ヒシ所ナリ

奉拜日

奉拜ハ始メ三大節ノミナリシカ、爾後元始祭新嘗

祭神嘗祭ニモ亦奉拜スルヲ得ルニ至ル後復三大

節ノミニ奉拜スルヲニナレリ

尋テ又勅語ノ謄本ヲ得タリ、是畏クモ 天皇陛下

御眞影

合六

道德ノ大本

騰本

奉讀日

奉讀日ノ改正

招魂祭

惟我國道德ノ大本ヲ仰セラレ、天下萬民ニ勅ラセ
 給ヒシヲ、文部大臣之レカ騰本ヲ作りテ、全國各學
 校ニ配付セシモノナリ
 勅諭ノ御聖旨ヲヨク知ラシムル爲メ、毎月第一土
 曜日、及祝日ニハ必ス之ヲ奉讀セリ
 二十五年ノ改正ニテ三大節學校祝日ニノミ、奉讀
 スルヲニナレリ

小倉遠行

明治二十四年四月五日ヨリ三日間小倉ニ於テ九

有志生徒

一週間

七十里

遠足ノ行軍

州ノ戦死者ノ爲メ招魂祭ヲ行フ
 本校教師六人、有志生徒三十九名ヲ率ヒテ之ニ赴
 シ
 同月二日本校ヲ發シ、福岡ヲ經テ、四日小倉ニ達シ、
 九日中津通ヨリ歸着セリ
 其延長里程七十里餘、一人ノ費用大抵一圓七十錢、
 皆生徒ノ自辨ナリ
 今迄大山ニ行キ、大肥ニ至ル等行軍ハ多カリシモ、
 國界ヲ出テ他州ニ入りタルハ今回ヲ始メトス

馬場氏ノ義捐金

馬場氏死ス

本校最初ノ校長タリシ、馬場氏ハ二十三年師範學校附屬小學校ニ轉セシカ、翌二十四年赤痢ニ罹リ遂ニ逝ケリ、依テ有志相謀リ石碑建築ノ舉アリ本校ノ藤木氏モ發起者ノ一人ニシテ、教員生徒ヨリハ義捐金ヲ募リテ其ノ費ヲ助ケタリ

小學校令改正

自治制布カレテ學校ノ規則モ之ニ伴ヒ、二十三年

著シキ變動ナシ

現任校長

十月改正令發布セラレ、二十五年十月之ヲ實施シタリ然レトモ本郡ハ之レカ爲メニ格別ノ變動ナク、其ノ著シキコトハ前ノ各項ニ記セル位ナリ此ノ改正ト同時ニ竹腰校長去テ藤木龜雄氏校長トナレリ、今ノ校長是ナリ

豫備科ヲ廢ス

簡易科ヲ廢ス

二十五年ノ改正ニヨリ、簡易校ヲ廢シテ尋常校トナシタレハ、行所ノナキ生徒モナクナレリ

必要ナシ

且ツ高等小學入校生ハ、皆尋常卒業ナレハ、左程學力ノ差アルヘキ筈ナキヲ以テ、別段豫備科ノ必要ナキニヨリ、二十六年三月限り之ヲ廢セリ

附記

蓄音器

二十六年三月宇佐郡驛貫村ノ人辛島某、大阪ヨリ蓄音器ヲ携ヘテ本校ニ來リ、生徒一同ニ聞カシメタリ

風琴

二十六年五月風琴ヲ購入シ、唱歌ノ時間ニハ、必ス之ヲ彈シテ、校内和氣洋洋々タリ

二十六年十一月本校生徒百十六名中川村天ヶ瀬地方へ修學旅行ヲナシ一泊シテ歸レリ

昨年ノ一學年ハ百二十餘人ノ生徒アリシヲ以テ二組ニ分テ授業セリ今年モ亦都合ニヨリテ分クルナラン

限豆歴史

公領私領

殿様

大名小名

領主ノ私有物

三百大名

維新前ニハ殿様ト云フモノアリ、殿様トハ俗語ニテ、之ヲ字ニ書ケハ、領主、大名、國主、或ハ侯伯ト書ク。殿様ノ大ナルハ數國ヲ領シ小ナルハ一郡一地方ニ止マレリ。

領内ノ土地人民ハ全ク殿様ノ私有物ニシテ、租稅ヲ課シ刑罰ヲ行フ等一切其勝手タリ。

吾國ニハ如此ノ大名甚々多クシテ、其數三百ニ下

私領

ラス、此ノ領主ノ持テタル地ヲ私領ト云フ

代官

此ノ外ニ將軍ノ有スル土地アリ、此ニハ幕府ヨリ代官ヲ遣シ、租税ヲ取立テ、農耕ヲ勵マシム

年限官

領主ハ其國ヲ子々孫々ニ傳ユレトモ、代官ハ時々

公方サマ

更迭スル年限官ナリ

代官ト大庄屋

將軍モ亦一ノ殿様ニシテ、只其勢大ナル故、他ノ諸侯ノ取締ヲナシテ、天朝ニ奉事スルニ過キス

公領

將軍ノ下ニ附ケル代官ハ、猶私領ノ地方ニアル大庄屋ノ如キモノナリ

公領ト定ル

此代官ヲ置キタル、將軍ノ直轄地ヲ公領、又ハ天領ト云フ

起源

大友氏亡フ

土地ニ此二種アリシカ、我豆田隈ハ何レナリシカト尋ヌルニ、建設以來、種々ノ變遷ニ遇ヒ、或ハ公領トナリ、或ハ私領トナリ、後遂ニ公領ト定リタリ

官木長次郎

國主大友義統、大間ノ怒ニ觸レ、領地悉ク沒收セラレ、ニ及ヒ、其遺地ヲ諸將ニ分與ス

日隈山

文祿三年明治二十七年官木氏來リテ、地ヲ日隈山ニ相シ、其頂上ニ龜翁山眞光寺ト云フ廢寺アリシナ今ノ天満宮社隣ニ移シ、其跡ニ城ヲ築キテ之ニ居ル

隈町

此時田島村ニ小キ市街アリシヲ、城下ノ河原ニ移シ、之ヲ隈町ト名ク

人民輻湊

土地河流ニ濱シ、運送交通至極便利ナルヲ以テ、爾來人民輻湊シ、商賣日ニ榮ヘ、遂ニ今日ノ繁盛ヲ見ルニ至レリ

石塊礫々

川原町裏河原ノ如キハ、其後久シク眞ノ河原ニシ

毛利氏

テ、石塊礫々タリシカ、何時トナク市街トナリタリ
其後三年ヲ經テ慶長元年、毛利伊勢守高政、日田ヲ分領スルニ及ヒ、其父九郎左衛門友重、中城ニアリテ餘地ノ代官タリ

朝鮮役

高政ノ朝鮮征伐ノ役ニ從フニ及ヒ、友重其子ノ領地ヲ預カル

要害ヲ堅ム

此時城壁ヲ修メ五階ノ天主閣ヲ造リ三階ノ城櫓ヲ立ツ、又城下ニハ周圍ニ溝ヲ堀リ、堀田町、上横町、下加隈ノ三方ニ門ヲ設ケテ、要害ヲ堅固ニセリ

廢滅

此城溝ハ何時廢レシカ詳ナラサレト、今ハ其跡判

然セス

封ヲ移ス
慶長五年毛利氏、封ヲ海部郡佐伯ニ轉セラレタレ
トモ、猶本郡ノ代官タルヲ以テ、其臣毛利隼人代リ
テ之ヲ務ム

小川氏
同六年高政カ支配ノ内、日田玖珠合セテ二萬石ヲ

分ナテ、小川光氏ヲ封ス

丸山城
日隈城ハ代官役所ナレハ、光氏ハ別ニ月隈山ニ築
キテ、之レニ居ル、名ケテ丸山城ト云フ

丸山町
此時友田村ヨリ、僅ノ人家ヲ移シテ城ノ南方ニ住
セシム、之ヲ丸山町ト云フ

石川氏
後十五年ヲ經テ、元和二年石川總輔本郡ヲ領スル

ニ及ヒ、改メテ豆田町トナス

豆田町
豆隈兩町起源ヨリ種々ノ變遷ヲ經タリト雖トモ、

天領
石川總輔封ヲ下總佐倉ニ移サレテヨリ維新マテ
ハ續キテ天領タリ

代官ノ時町内政事

町ト村
町ト村トハ其風俗生業異ナルヲ以テ之ヲ支配ス
ル方法モ亦タ異ナレリ

町年寄
町ニハ町年寄ナルモノアリテ町内一切ノ世話ヲ

三松氏
中村氏
日隈氏
竹田ノ庄屋
組頭
役宅
肝煎

カス、是レハ世襲ノ役人ニシテ村ノ庄屋ニ同シ
豆田ニテハ、三松氏世々上町ノ年寄トナリ、中村氏
下町ノ年寄タリ
隈ハ日隈氏ノミニシテ、河原町ハ竹田ノ庄屋之ヲ
管セリ
町年寄ノ下、一小區域毎ニ組頭ナルモノアリテ之
ヲ助ク
當時ハ官衙トテハナク、皆其自宅ニテ、事務ヲ司リ、
御役宅ト稱セリ
又小使アリテ、公事ノ使ヲナス、之ヲ肝煎ト云フ、肝

租税
年貢
運上
冥加金
地子錢

煎ハ平常自宅ニアルヲ以テ、之ヲ召スニハ、板ヲ打
テ或ハ竹カヒ法螺貝等ヲ吹ク
租税ニハ、年貢、運上、冥加金、地子錢等ノ名アリ
年貢ハ田地ヨリ徴ス米穀ナリ
運上ハ今ノ營業稅ナリ、故ニ酒家ニハ酒運上アリ、
宿屋ニ宿屋運上、店ニハ店運上アリ
冥加金ハ今ノ所得稅ノ如キモノニテ、富有ノモノ
ニ、其財産ニ應シテ、出金セシムルモノナリ
地子金ハ公田ノ利田、或ハ家屋等ヲ借用セシ人ヨ
リ、徴收スル稅ニシテ元祿年間代官三田守長ノ時

ニ始リシト云フ

此等ハ皆代官ノ命ニ從ヒ、町年寄カ人民ヨリ徵收ス

其外町内ノ諸雜費ハ、町内ノ人相會議シテ、之ヲ定ム

又役目ト稱シテ、道路橋梁ノ造築費、代官所家屋ノ修繕費ヲモ辨セリ

蓋昔ハ七公三民トカ、六公四民トカ稱シテ、人民收得ノ大半ハ之ヲ官ニ輸シ、其税法今ヨリモ餘程苛刻ナリシ

町内費

役目

七公三民

六公四民

凶年
官錢貸與

左ノト凶年及不時ノ災變ニ際シテハ、必ス幾分ノ宥恕ヲ與ヘ、時トシテハ、官錢ヲ貸與スルヲモアリキ

限ノ大火

元祿十二年、限町ノ大火ノ如キハ一人毎ニ四匁三分ヲ貸セリ

享保ノ飢饉

又享保ノ大飢ニハ、毎日一人ニ米二合ヲ與ヘ、其他種子料牛馬飼養料ヲモ貸與セリ

掛屋

コハ町内ニ關シタルトニハアラサレトモ、昔掛屋ト稱スルモノアリテ、町内富有ノモノニ、無利息ニテ官金ヲ預ケ、入用ノ時取出シテ其用ヲ辨セリ

豆田ニテハ廣瀬氏千原氏之ヲ務メ、隈ニアリテハ
森氏山田氏之ヲナセリ

祇園ノ山鉾

祇園ノ山鉾

今茲明治二十七年ヲ去ル、百八十一年前、正徳四
年兩町始メテ祇園祭ニ山鉾ヲ造ル
此ノ以前全ク山鉾ナキニアラサレトモ、此度ノ如
ク祇園祭ニハ必ス壯大ノ仕懸ヲナストハ極リ居
ラサリキ

ニワカ

此迄モ祇園祭放生會盂蘭盆等ノ如キ、時々ノ賑ニ、

山鉾ノ往來

ニワカナルモノヲ出シ、飾人形ヲ作り、或ハ小ナル
山鉾様ノヲヲモナシ居レリ
然ルニ今歳ニ至リ、町内相議シテ一大山鉾ヲ作り、
神輿ノ先驅ヲナス
竹田ノ山鉾ハ隈ノ祇園社ニ來リ、隈ノ山鉾ハ竹田
ノ祇園社ニ到ル

製方

豆田ハ神輿ノ前ニ進ミテ、中城ノ行宮ニ導キ、歸幸
ニハ之ヲ送リテ本社ノ前ニ到ル
其ノ製上ニ宮殿岩石ヲ造リ、其間ニ造リ物ヲ置キ、
下ニ車輪ヲ着ケ引廻ルニ便ナラシム、高キ八十間

高サ十間餘

餘ニ達シ高ク屋上ニ拔キテ、明ニ頂上ノ裝飾ヲ認
ムル能ハサルアリ

費用

其費用一山、四五十圓ヨリ、貴キハ二三百圓ナリ

出金法

此巨額ヲ一時ニ出金スルハ、甚困難ナルヲ以テ、毎
日少許ツムヲ出合セテ、之カ保管ヲ有力者ニ頼ミ、
祭典ノ際之ヲ使用スルナリ

日切錢

其出金額、家々ニヨリテ、差アリ是ヲ日切錢ト云フ

限ノ組合
第一

當時川原町ハ竹田村ノ内ナリシカ、人民ノ生業風
俗、限ト相同シキヲ以テ、山鉾モ毎年造リテ之ヲ獻
ス

第二

次ニ田中町、紺屋町、隔年之ヲ飾ル

第三

其次ハ中町、我有木ニシテ、此レモ同シク隔年ナリ

第四

第四ハ上横町ニシテ町内廣濶ナルヲ以テ、毎年之
レヲ獻スル筈ナリシカ、後減シテ二年ニ一度、作ル
事ニナセリ

豆田組合
第一

豆田ニアリテハ、田町ハ元ト、市街ヲナサムルヲ以
テ、山鉾モナカリシカ、人家次第ニ殖ヘタル故、毎年
作ル様ニナレリ

第二

上町ハ室町、平野町、矢幡町、三年更代ナリ

第三

下町ハ一丁目、二丁目、三丁目、更々之ヲ作ル

第四

一大事業

中城ハ南北二組、隔年其任ニ當ル

此ノ制今ニモ續キテ、町内ノ一大事業タリ

日田風

代官跋扈

古徳川幕府盛ナリシ頃ハ、代官等モ其威ヲ假リ、非常ニ跋扈セリ

諸侯按察

且ツ九州諸侯按察ノ任ヲモ、陰ニ日田ノ代官ニ持セタリシカハ、小ナル殿様ノ如キハ、虎豹ノ如クニ之ヲ懼レ、時トシテハ大太名モ之カ爲メニ、震撼セラル、トアリキ

九州ノ侯伯
ヲ會ス

又幕府ノ教令ヲ布ク爲メ、九州ノ侯伯ヲ、一時ニ此地ニ召集スルヲ度々アリシヲ以テ、市街非常ニ繁昌シ來レリ

御用達

各地諸侯ハ、御用達トテ、豫メ金子ヲ當地富家ニ預ケ置、入用ノ節、取出シテ用ヲ辨セリ

經濟家

故ニ當地ノ人ニハ經濟ニ通シ、他藩ノ財政ヲ經營セシモノモアリキ

府内ノ財政

廣瀬氏ノ如キハ、大分府内藩ノ財政ヲ握リ大ニ之ヲ改革セリ

富豪多キ故

斯ク當時諸藩ノ財政ヲ司リシモノ多カリシ故、町

内ノ殷富財力田舎ニ似ス、今富豪多キモ蓋シ之カ
爲ナラン

特權

又此地幕府直轄ノ地ナリシヲ以テ、其威權ヲ保ツ

爲ニ領内ニ種々特權ヲ與ヘタリキ

例ハ此地ノ人ト他領ノ人ト訴訟ヲ起スモ、又他領

ニ入りテ罪ヲ犯スモ、必ス此地ニ來リテ代官ノ裁

治外法權

判ニ服セサルヲ得ス則チ今ノ治外法權ヲ特有セ

リ

罪死ニ當ル

日田ノ人曾テ福岡ニ至リ、禁ヲ犯ス罪死ニ當ル吏

福岡藩恐ル

執ヘテ、罪ヲ正サント乞フ、代官之ヲ争フ、福岡藩大

人民跋扈

ニ恐レ、吏ヲ刑シテ、之ヲ謝ス

舊幕府時代ハ上モ下モ、如此ヲ以テ、細民ハ之ヲ傘

ニ恃ミ、他領ニ入りテ、專横跋扈至ラサル所ナシ

馬ヲ芝居場

或ハ馬ヲ演劇場裡ニ驅リテ、見物ヲ妨ケ、以テ自ラ

ニ驅ル

勇ナリトナシテ、之ニ誇ルモノモアリキ

人情

蓋シ權利ヲ妄用スルハ、君子聖人ニアラサルヨリ

ハ、免レサル所ニシテ、是人情ノ常ナリ

唯一ノ武器

俠狂漢ナトハ之ヲ以テ、唯一ノ武器トナシ、少シニ

テモ意ニ滿タサルアレハ、相結ヒテ之ヲ打撃シ、或

ハ其家ヲ毀テ、自ラ誇リテ日田風ヲ吹セキト稱ス

維新畫一日
田風ヤム

何ソ世界ニ
向テ一大偉
業ヲ試サル

是レ吾日田ノ古風ナリシカ、維新以來全國ヲ通シ
テ、制度畫一、法律同等ニナリシヲ以テ、容易ニ日田
風ヲ吹スルヲ能ハサルニ至レリ
左レト餘勇凜々今尙存シテ亡ヒスンハ、請フ日田
人士ヨ之ヲ他方ニ溢出シ、世界ニ向テ何ソ一大偉
業ヲ試ミサル

明治二十七年六月二十五日出版
明治二十七年七月十日發行

非賣品

著作兼發行者

小野藤太

大分縣宇佐郡
高並村百七拾壹番地

印刷者

小島壽吉

大分縣日田郡
豆田町七百五拾壹番地

